

2019年度終了 首都大学東京教育改革推進事業
(学内提案分【B1】正課外の教育企画)成果報告

科学技術プレゼン力向上プログラム — Step UP Program —

都市環境学部

○代表 都市基盤環境学科 教授 横山勝英

都市基盤環境学科

教授 村越 潤

地理環境学科

教授 松山 洋, 教授 松本 淳

環境応用化学科

教授 高木慎介

観光科学科

教授 菊地俊夫, 教授 沼田真也

建築学科

教授 永田明寛

都市政策科学科

教授 市古太郎

取り組みの目的

教育の国際化が重要トピック

これまでの取り組み

- ①都市外交人材育成基金を通じた博士後期課程留学生の受け入れ
→研究の国際化に貢献
- ②短期・中期の学生海外派遣
→意欲的な学生の国際化

	英語留学生の受け入れ	日本人学生の海外派遣
大学院D	◎(都市外交)	
大学院M		◎(本学制度, AIMS)
学部		◎(本学制度, AIMS)

指導教員とマンツーマンで、日本人学生への波及効果が限定的

意欲の高い学生のみが参加し、クラスの学生への波及効果が限定的

- 学生は国際化の重要性は認識している
- 英語授業は重点的に実施されているが、
- 専門との結びつきが弱く、活かしたスキルとしての英語力につながっていない可能性
- 以上より、教育の国際化を推進するためには、低学年のうちから専門分野に関して国際コミュニケーションをとること
- 自分の専門知識や考察を英語で積極的に発信できる能力を身につけることが重要

取り組み内容

学部生・大学院M学生

…国際化促進のターゲット

本学制度により留学経験のある学生

JASSO・JST・AIMSの短期留学制度により招へいたフィリピン等の留学生

大多数の留学経験の無い首都大生をどうやって国際化させるか？

- ①ASEANの優秀な学部留学生と共修することを旨す
- ②この2者は意識のベクトルが違いすぎるので、本学の留学経験者にコーディネーターとなってもらう(TA)
- ③正課の授業，ゼミ，研究活動と一緒にを行うことで、国際コミュニケーションに対する意識のハードルを下げる



取り組み内容

授業・ゼミ参加
(大学院の一部は英語化)



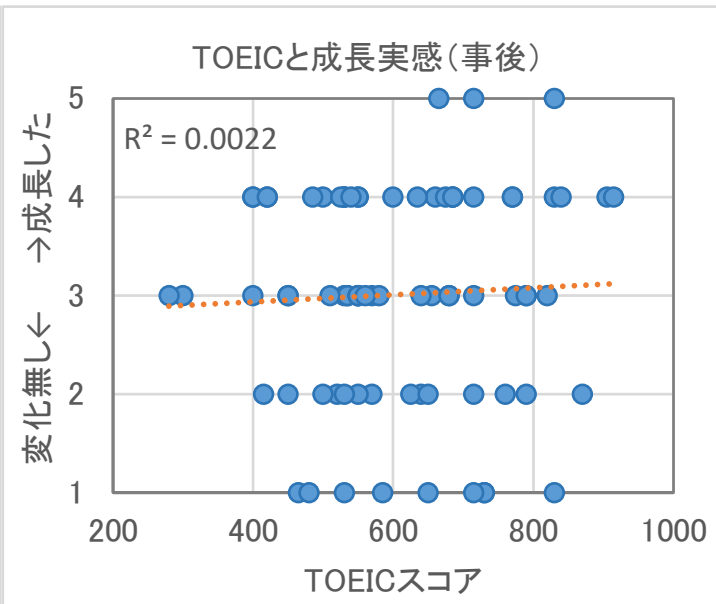
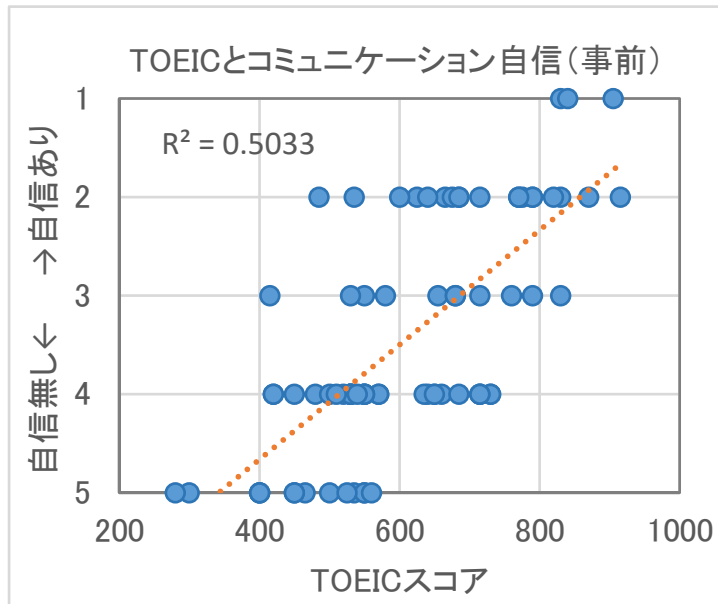
現場見学会



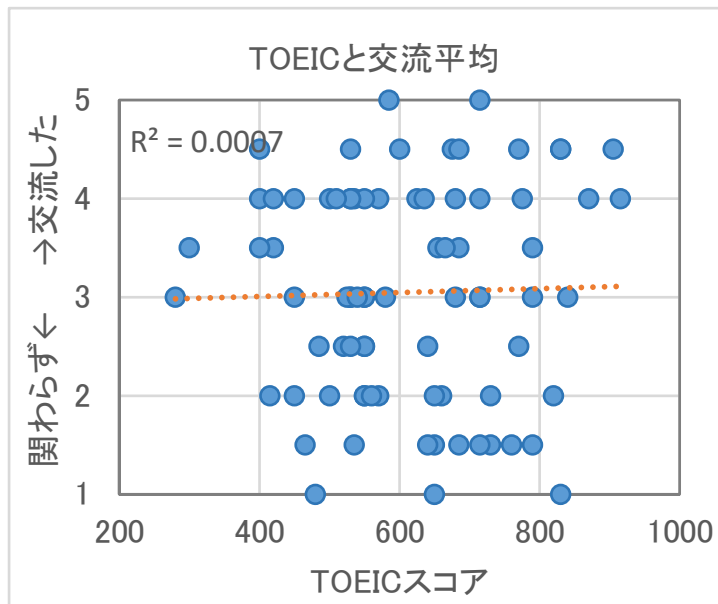
懇親会



事業効果：TOEICスコアと活動の相関

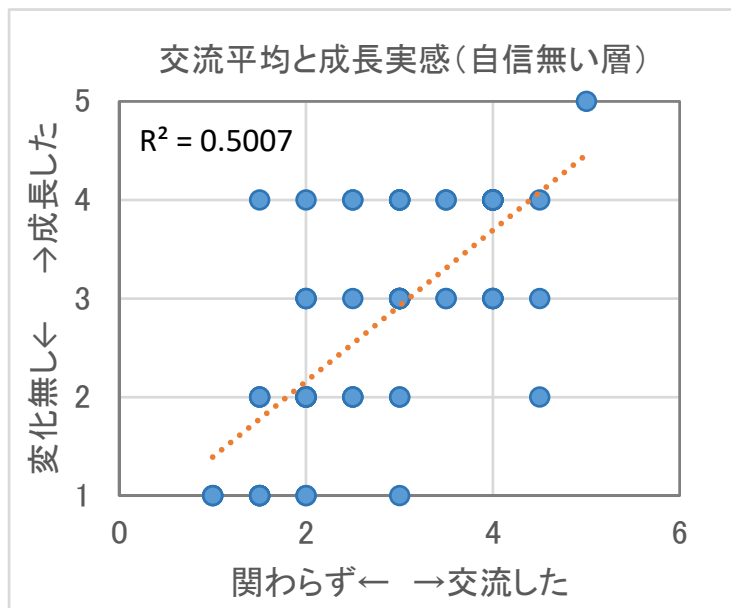


n=79



- ①事業実施前の英語コミュニケーションに対する自信はTOEICスコアと相関がある
- ②事業実施後のコミュニケーションに関する成長実感はTOEICスコアと相関が無い
- ③事業中の交流度合いとTOEICスコアには相関が無い

事業効果：交流度合いとの相関



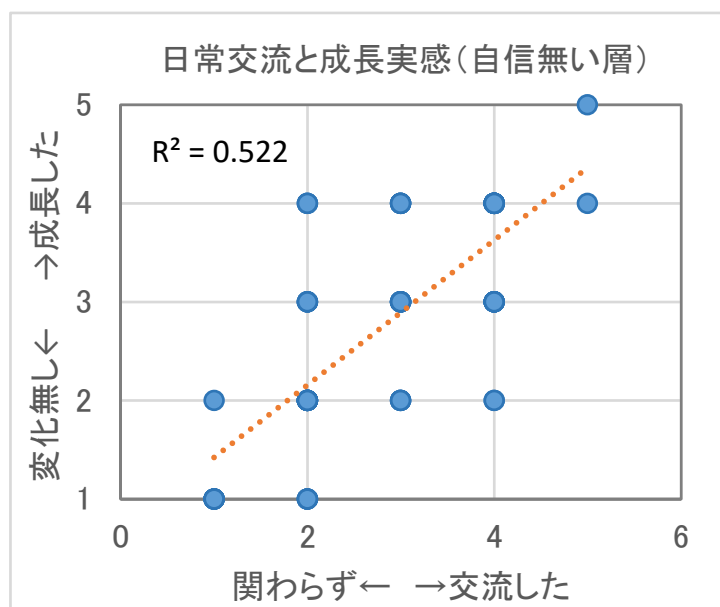
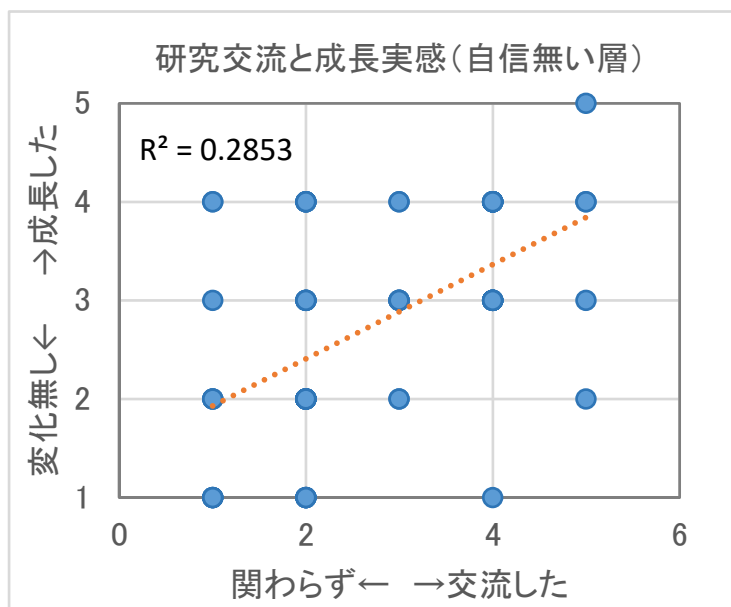
事前に自信が無かった層(スコア3~5)を抽出

①積極的に交流した学生はコミュニケーション力の向上を実感した

②研究面での交流の積極さとコミュニケーション力の向上には弱い相関が見られた

③日常面での交流の積極さとコミュニケーション力の向上には相関が見られた

→英語力を気にするより、学生生活を共に過ごす積極性が重要



n=76

事業効果：実際の取り組みと今後の予定

- 大学院講義の英語化がスムーズに進められた(観光, 応化, 都市基盤)
- 参加研究室のゼミは留学生を交えることで, 原則として英語によりPPT発表が行われた
- その結果, 卒論や修論の発表会(中間・最終)の一部を英語化することができた
- 学術論文や学校口頭発表・ポスター発表を英語で実施する学生が現れるようになった
- 文科省国費留学生特別プログラムに採択された(都市基盤環境学域, 2020~2022)
- フィリピンから海外居住者特別選抜試験を活用して私費留学生が受験した(2021年度入学予定)

- 学生の英語力が向上してから講義や研究発表会を英語化するという手順だと, なかなか思うように進まない
- 英語化のスケジュールを先に設定し, ①講義の英語化→②発表PPTの英語化→③論文発表の英語化→④論文概要の英語化, と目標水準を毎年一つずつ上げてゆく
- **日本人学生が追いつけないのでは? 上記を総合的に進めることで対応できることは確認済み**

本事業を助成して下さった大学当局、事業を強力に推進して下さいました先生方、学生諸氏、各種サポートをして下さった事務方の皆さまに感謝の意を表します

